

婦中地区フォトウォークラリー

9月13日(日) 速星公民館スタート～まちの魅力を再発見！

婦中地区フォトウォークラリーに西高生が参加しました。クイズや指定ポーズなどのミッションをこなしながら、チェックポイントを次々と巡ります。西高新聞部チームは婦中大橋の付近まで足を延ばし、約30カ所を制覇！薄曇りでも日差しは意外と強く、気づけばすっかり日焼け。「めっちゃ疲れた！」と言いながらも最後まで歩き切りました。生徒会チームは、見事1位となりいい笑顔でした。



西高新聞

発行者
富山県立
富山西高等学校
新聞部
富山市婦中町926

男子学校対抗 強豪鹿児島南高との熱戦

フェンシングインターハイ

令和8年8月9日(日)～8月13日(木)in滋賀ダイハツアリーナ

8月13日、インターハイ男子学校対抗戦。富山西高は2回戦で北陸高（福井）と対戦しました。前田迅理選手が3戦すべてを制する活躍を見せ、高野兼斗選手、向島京平選手も白星を挙げ、5対2で快勝しました。

3回戦で対戦した鹿児島南高（鹿児島）は、春の全国高校選抜でも富山西が敗れた強豪です。当時、西村監督は「日本を代表する選手が複数おり、攻守にミスの少ない確実な試合をする」と評していました。

迎えた3回戦。個人フルーレでも全国ベスト4に進出した白男川瞬選手、安武龍杜選手らを擁する鹿児島南が、序盤からその強さを見せます。

そんな中、富山西が意地を見せたのが第5試合でした。前田選手が挑んだのは、1年次から3年連続でインターハイに出場し、「チーム力は日本一」と語って仲間を率いる鹿児島南の羽田光洋主将。チームメイトに背中を叩かれ「喝」を注入された前田選手がピストに入ると、試合は2対2、3対3、そして4対4。互いに一步も譲らない大接戦となりました。

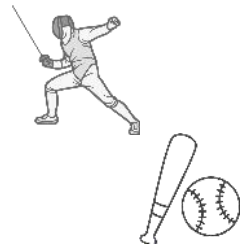
前田選手がポイントを奪い、万歳やガッツポーズを見せるたび、富山西のベンチとスタンドも大歓声。勝負は最後の一本へ。前田選手が渾身の一突きを決め、5対4！全国の舞台を何度も経験してきた強敵との接戦を制し、富山西に一勝をもたらしました。結果は1対5。全国の壁は厚く、全国屈指の選手たちと剣を交えた、富山西のインターハイが幕を閉じました。



女子学校対抗戦 熱戦も4対5で惜敗

8月12日、インターハイ女子学校対抗1回戦。富山西高は岩国工業（山口）と、最後まで勝敗の分からない熱戦を繰り広げました。大きな山場となったのは、大将同士がぶつかる第7試合。佐藤選手が、4対2と勝利まであと一点に迫ります。「いける！」と思ったその直後、流れが一変。わずか1分間に3点を奪われ、4対5で逆転負け。まさに「魔の1分間」でした。西村監督も「あそこが勝負どころだった」と振り返ります。

その後、第8試合を西野選手が取り、土壇場でチームを4対4に戻します。勝負は最終第9試合へ。友崎選手も粘り、こちらも4対4。あと一本！男子生徒をはじめ、校長や三柏会会長、教員、保護者らの声援が響く中、最後の一本を奪ったのは岩国工業でした。結果は4対5。友崎選手は試合後、悔し涙を流しました。勝利まで、本当にあと一本。それでも、一本をめぐって何度も流れが変わり、選手も応援席も一緒になって戦う——そんな学校対抗戦の面白さが詰まった大熱戦でした。3年生からバトンを受け取った選手たちの、次の戦いが楽しみです。



西南野球、最後まで響いた声援！



7月11日、砺波市野球場は夏らしい青空に包まれました。富山西・富山南の連合チーム「西南」は、部員わずか10人。学校の垣根を越えて結束し、3塁側スタンドの大声援を背に第2シードの強豪・氷見高校に挑みました。

試合は序盤、氷見の猛攻を受け2回までに8失点。エースで主将の吉田成輝（背番号1番）は一度マウンドを降りますが、3回表に右翼へチーム初安打を放ち、反撃の口火を切りました。4回表には横井蓮志（背番号3番）が四球を選び満塁の好機をつくると、代打・安藤拓馬（背番号7番）が押し出し四球をもぎ取り、続く押し出しと合わせ2点を返しました。

守備では、1年生の北村仁（背番号10番）が左翼手として奮闘し、交代後も伝令として何度もマウンドへ走り仲間を鼓舞しました。4回裏には前川監督の「最後はお前で行く」という言葉を受け、吉田主将が再び登板。氷見の強力打線に苦しめられながらも、最後まで気迫の投球を続けました。10人の選手をベンチから支えたのが、マネージャーの石田菜乃子（3-3）と畑心夏（3-1）の2人です。笑顔と明るい声で選手たちの背中を押し続けました。

結果は2対14（5回コールド）。目標の2勝には届きませんでしたが、吉田主将は「仲間を信じ全力を出し切った」と語りました。3塁側スタンドでは、生徒たちの声援が最後まで響いていました。